

■ 編集だより

編集後記

第109回日本精神神経学会学術総会は、本年5月23～25日、福岡国際会議場・福岡サンパレスにおいて開催された。今回の大会は、参加登録者数が6,312名に達し、国内外の招待者を含めると実に6,400名超の参加者を迎えた学会史上最大規模の大会となった。うち、本学会員と非学会員の医師の総数は5,200名超であったから、国内の精神科医の3人に1人が出席したことになる。また、招待者以外にも海外から75名の参加者があった。かくも大盛況のうちに第109回大会が終了したことを、そのプログラム委員会にたずさわった者として大いに喜びたい。今回の開催にご協力いただいた関係各位に厚く御礼を申し上げる次第である。

本大会が成功した理由はいくつか挙げられよう。まず会期を通して天候に恵まれた。最近の福岡市を悩ましているPM2.5は幸い影響しなかった。福岡市における大会開催が、2006年（第102回大会）以来、7年ぶりということもあって、我が食都を訪れることを楽しみに参加した会員も少なくなかったようである。しかしなにより、今回の成功の鍵は大会プログラムの編成にあったと自負している。もともと、神庭重信・会長、中村 純・副会長、川嶋弘詔・事務局長をはじめ主催者側は、会員の動員に向けて様々な努力を尽くされたのであるから、以下に述べることも、私個人の感想であることを断っておく。

まず、大会テーマである「世界に誇れる精神医学・医療を築こう：5疾病に位置づけられて」に焦点を当てた指定シンポジウム（メインシンポジウム）を10余り設定した。すなわち、医療計画、精神保健福祉法改正、DSM-5、主要精神疾患（統合失調症、うつ病、認知症）の医療、他科との連携、産業精神保健などの各話題についてコーディネーターを指名し、私たちが今討論すべき課題を明確にした。この方針は、本大会の方向性を強くアピールすることに寄与したと思う。

一方、一般シンポジウム案の応募は60以上に及んだが、あいにく会場と時間の都合上、本学会の各種委員会や他学会が関連した44個に絞らざるをえなかった。とはいえ、採用されなかった企画案も無碍にするには惜しいものばかりであった。それらにはトピック・フォーラムと称する90分枠のセッションを設けた。また、従来よりも教育講演を減らし、精神医学研修コースや専門医特別講座をなくした。ワークショップの事前登録制も廃した。結果的に学会員による学会員のためのプログラムができあがったようだ。

大会HPと事前に会員に送付するプログラムにも工夫をこらした。日程表をカラー化し、各セッションの判別を容易にした。似たようなテーマのセッションが同時間帯に重複しないように配慮したつもりであるが、こればかりは上手くゆかなかった。

もちろん反省すべき点もある。6,000名を超える参加者を擁するには会場がいささか狭すぎた。多くの会場から聴衆が溢れ、通常は密閉する扉を開け放つ事態も生じた。会場に入れずとも熱心に耳を傾ける人たちに申し訳なかった。かたや、サンパレスホール(2,300席)

は、国際会議場から離れているせいも、国際シンポジウムの空席が目立ったのは残念であった。

本学会は、学術集会の開催に際して、製薬企業などの寄付や共催を一切受けていない。このことは運営上厳しい面もあるが、今回の成功を振り返ると、ランチョンセミナーやメーカーの展示ブースなどないほうが、やはり自由で闊達な学術集会が可能になる。私たちの integrity を気高く保つために、堅物のストイシズムが今後も堅持されることを願う。

黒木俊秀